

主 題：今日を正しく生きよ

聖書箇所：詩篇 90篇12節

詩篇90：12にモーセはこのように言っています。「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」、私たちはまた一つ年をとったとか言って年を考えます。しかし、モーセは「自分の日を正しく数えることを教えてください」と神に求め祈りました。というのは、彼自身、人生というのは短くはかないものであることをよく知っていたからです。だから、彼は神の知恵をいただいて今日という日を正しく無駄なく有意義に過ごして行きたいと、これが彼の望みでした。なぜ、そのようなことを彼が望んだのか、というのは、特に、あのエジプトの地をモーセが出て来た後、彼が率いた数百万人のイスラエルの人々が、余りにも人生を無駄にしたことを見たからです。モーセは繰り返してこの人々が自らの愚かさによって主に逆らい、人生を無駄にしてきたことを見てきました。同時に、彼はそのような愚かな罪深い人間に対する神のすばらしさ、神のご愛を見て来たわけです。そのモーセは今一度神の前に、神さまどうぞ今日生きる知恵、今日を正しく生きる知恵を与えてくださいと祈るのです。これこそ、私たちにとっても必要な生き方です。明日のことが分からない私たちに必要なことは、今日というこの神がくださった日を神の前に正しく無駄なく有意義に生きて行こうとすることです。モーセはそのことを神に求めました。というのは、モーセはこの荒野の旅を通して、彼の人生を通して、神がどんなに偉大な方であるかということを学び続けてきたからです。ですから、この詩篇90篇を見ても彼が私たちに教えていることは、神がすばらしい方であるということです。大切なことは、私たちがみことばを学んできて神が私たちにチャレンジすることは、神がどんなにすばらしいお方であるかということを忘れてはいけないということです。なぜなら、私たちはすぐに忘れてしまうからです。ある人は頭にいっぱい知恵をもっているかもしれない、しかし、それは心に感動をもたらさない、そんな知恵はむなしのです。どれだけ知恵をもっている、それがあなたの心に今日神の前に正しく生きて行こうという思いを与え、そのように生きようとし、実際に生きることがなければ、それはあなたの力ではありません。私たちはどんなときでも、どんなところにおいても、何をしようとして、いつも神がどんなにすばらしいお方であるかということをしっかり覚えることです。だから、聖書はそのことを私たちに繰り返し教えているのです。毎週みことばを聞き、毎日みことばを読んで、そこで神が何度も私たちに教えることは、わたしはこのような神だ、わたしはこのような存在だということです。そして、私たちは鈍いことに、みことばを読んでいても聞いていても教えられていても、なかなか悟らないのです。だから、このメッセージが必要なのです。

モーセはこの90篇の1節から神のすばらしさについて教えます。特に11節までに、モーセは神はこのようなお方であると四つのことを教えます。

☆モーセが教える神とは？

1. 神は守り主 1節

1節に「主よ。あなたは代々にわたって私たちの住まいです。」とあります。神は住まい、家だと言います。家とはどのようなものでしょう？そこに住む者にとってオアシス、憩いの場であり、安らぎ、平安、喜びがあります。家に戻って来るとほっとします。よかった、ほっとする、安心すると…。旅に出ると早く家に帰りたと思います。どこに行ってもどんなに楽しい経験をしていてもやっぱり家がいいとなります。モーセは神はそのような存在だと言います。神は私たちの住まい、つまり、私たちを守ってくださるのです。あなたをしっかりと守ってくださる方です。つまり、家がそうであるように神はあなたにとって安らぎを与えることのできる唯一のお方であり、安心をもたらしてくださる唯一のお方であり、あなたをしっかりと守ってくださる唯一のお方だからです。だから、私たちクリスチャンが神とともに歩んでいるなら、そこに私たちは本当の平安をもつのです。主にあって憩うことができる、主にあって安らぐことができる、主にあって楽しむことができるのです。

イエスはヨハネ14：20で「その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。」と、聖霊なる神がイエスを信じる一人ひとりに与えられることによって、私たちと神がひとつになっているということが分かるのです。神は遠い存在ではなくて、イエス・キリストを信じる一人ひとりにとって、あなたは神の中に生き神はあなたの中に生きておられる、一つとされているということです。ちょうど私たちがその家の中に住んでいるように、その神にあって私たちはすばらしい祝福をいただくことができるのです。確かに、モーセはそのことをよく考えたのでしょう。というのは、彼は荒野を旅していたからです。自分の本当の住まいというものがなかつ

た、いつも移動していたのです。ですから、もしかすると家というものに憧れていたのかもしれませんが。彼は最初の40年間エジプトにいたのです。そして、その後の40年間はミデヤンの野にいました。そして、残りの40年間はイスラエルの民を率いたわけです。定住したことがありました。そのすばらしさをもって、今はこうしてここからあの場所へと移動しているけれど、かつてのことを思い起こして、そのすばらしさを今家がなくても神にあって経験することができる、なぜなら、定住していても神がいなければ今言ったような本当の喜び、安らぎ、安心を得ることはできないからです。でも、クリスチャンはそれをどんなときでも経験することができるのです。だから、モーセはそのことを思っただけでその神に対して、あなたは偉大なお方である、なぜなら、あなたは私を守り続けてくださる、ちょうど住まいのような、そのような存在であるとこの1節で言うのです。

2. 永遠の神 2, 4 節

2 節「**山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、とこしえからとこしえまであなたは神です。**」、4 節「**まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようにです。**」と、モーセは二つ目に、私の神は永遠の神であると教えます。永遠に存在しておられる方、この世界を造られる前から神は存在しておられる、私たち人間や動物のように死んでしまうものではない、始まりも終わりもない、永遠から永遠に存在しておられる方だと言います。だから、信頼を置くことができるのです。また、「**千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようにです。**」と4 節で言うように、神の前には時間というものがないのです。神は時間を超越しているのです。だから、多くの人が言うのです、2000年前にイエスが亡くなったというけれど、そのイエスと私たちとどんな関係があるのですか？2000年前の出来事ではないですか？と。それは私たちが時間の中に生きているからです。神にとっては2000年前であろうと3000年前であろうと、それはひとときのように言うのです。つまり、神は時間を超越されていて、今この瞬間にすべてのことをご覧になっておられます。私たちのように時間の中に生き、不完全なものには理解し難いことですが、この瞬間に天地創造をご覧になっておられ、この瞬間にすべての滅びを見ておられるのです。同時に、その瞬間に今私たちがここに集まって礼拝をもっていることも神はご存じであるし、すべてのことを一瞬に見ておられるのです。そういう神だと言うのです。

3. 主権者 3, 5, 6 節

この方は主権者である、人間のいのちを司っておられる方だと言います。3 節「**あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」**」、5-6 節には「**あなたが人を押し流すと、彼らは、眠りにおちます。朝、彼らは移ろう草のようです。：6 朝は、花を咲かせているが、また移ろい、夕べには、しおれて枯れます。**」と、つまり、私たちのいのちというのはこの方の御手のうちにあると言うのです。あなたが長生きしようとどれだけ願って節制しても、神がこれまでと言われたらそれまでなのです。だからと言って、不摂生しても良いということにはなりません。コリント人への手紙の中でパウロが教えているように、あなたのからだは神の宮であると、自分のからだをしっかりと管理して行くことが必要です。しかし、モーセが分かっていたことは、私たちを造られた神は私たちのいのちの長さをちゃんと決めておられるということです。そのいのちはこの方の御手のうちにあると言うのです。この方はちりからあなたをお造りになりました。そのように創世記3：19でみことばが教えています。「**あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。**」、ちりから取られたからちりに帰らなければならないと。この神はご自身の計画に沿って、あなたをそのちりからお造りになり、神がこれまでと言われたときにちりに帰って行くと、あなたのいのちはこの方が支配しておられると、そのことをモーセはしっかり理解しているのです。

4. 公正なさばき主 7-11 節

「**：7 まことに、私たちはあなたの御怒りによって消えうせ、あなたの激しい憤りにおじえます。：8 あなたは私たちの不義を御前に、私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。：9 まことに、私たちのすべての日はあなたの激しい怒りの中に沈み行き、私たちは自分の齢をひと息のように終わらせます。：10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。：11 だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。**」、つまり、モーセはここでこの神は必ずあなたの罪をさばかれるお方であるということを明言するのです。モーセ自身そのことを確信していました。なぜなら、自分の横にその罪ゆえに神のさばきを受けている民がいたからです。恐らく、モーセがこのことを書いているとき、彼の頭の中にあっただのは民数記14章の出来事であったのだらうと言うのです。何があっただけでしょう？モーセはシナイ山からカデシュにやって来ました。律法をもらってから彼らは旅をしました。このイスラエルの民は神によってしっかりと守られていました。そして、約束の地カナンはもうすぐでした。ところが三日間旅をした彼らは神に対して不平不満を言い始めるのです。民数記11章に出てくるのは、神はイ

スラエルの人々のために食べ物を与えていました。マナです。彼らが旅をして行くのに必要な食べ物を神は備えてくださっていました。ところが、彼らはその中にあってつぶやくのです。11:1-3に「さて、民はひどく不平を鳴らして主につぶやいた。主はこれを聞いて怒りを燃やし、主の火が彼らに向かって燃え上がり、宿営の端をなめ尽くした。2すると民はモーセに向かってわめいた。それで、モーセが主に祈ると、その火は消えた。3主の火が、彼らに向かって燃え上がったので、その場所の名をタブエラと呼んだ。」とあります。火が燃え上がったということです。神の前に不平を言った民に対して神のさばきが下ったのです。しかし、その後、また彼らは神の前に不平を言うのです。神が備えてくださったこのマナに対して不平を言ったのです。肉が食べたいと言いだめたのです。彼らの問題はいったい何だったのでしょうか？神が奇跡的に彼らのところに「うずら」を送られました。大体80～90センチのところにうずらが飛んで来るようにされたのです。なぜなら、誰でも捕まえることができるためです。そのような自然界では有り得ないことを神はなさった、なぜかという、神の約束は必要なものはちゃんと与えると言われたからです。その約束を受けていながらこのイスラエルの民は神を疑うのです。そして、肉が与えられたときに、肉が彼らの歯の間にあってまだ噛み終わらないうちに、主の怒りが民に向かって燃え上がった、そして、主は非常に激しい疫病で民を打ったというのです。イスラエルの民は神からマナをいただいていた、そして、彼らはこう言ったのです、私たちは肉が食べたいと。そして、神はうずらを送りました。そのうずらを彼らが調理して食べようとしたそのときに、神の怒りが下ったのです。何が問題だったと思いますか？なぜ神はお怒りになったのでしょうか？それは、この人々はそのように神を疑ったことを神の前に悔い改めなければならないのに、誰も悔い改めないのです。彼らの関心は自分の欲を満たすことしかなかった、自分の目の前に備えられた肉を食べることしかなかった、神に対する感謝も、神に逆らったことへの悔い改めもなかったのです。彼らの心を支配していたのはその欲でした。そこで神は彼らのそのような罪に対してさばきを下したのです。ですから、この場所を「キプロテ・ハタアワ」と呼んだと言うのです。「欲望の墓」です。彼らが欲望のままに生きた、欲望のままに行動した、神の前に心を開いていなかった、それゆえに神の審判が下ったのです。このようなことが民数記11章に出てくるのです。ところが、16章に進んで行くと、レビ人でイツハルの子コラがモーセに逆らうのです。コラは滅びました。16章の中を見ると14700人のコラに先導された人々が滅んでいます。もちろん、コラの子孫の中で生き残った者もたくさんいます。コラというのは主の宮において門衛をしたり歌うたいであったのです。詩篇の中にも彼らの歌が出て来ます。ところが、このコラがモーセに逆らい、人々が同じようにモーセに逆らった、そして、神は彼らをさばかれたのです。その神の審判を見たのにも拘らず、この民数記16:41から見ると「あなたがたは主の民を殺した」と言ってモーセとアロンに向かってつぶやき始めるのです。何が起きているのかお分かりになりますか？モーセに逆らった人々に対して神はさばきを下されたのです。神が立てられたこのリーダーをさばいたということでこの人々は滅ぼされたのです。そのような神のわざを見ていながら彼らは「あなたがたは主の民を殺した」と言って、またモーセたちに逆らい始めるのです。モーセたちを非難するのです。その後、また神は彼らに対してさばきを下されるのです。彼らはなぜこのようなことを繰り返したのでしょうか？彼らはその欲望に従って生きてだけでなく、彼らには神に対する恐れがなかったのです。彼らは自分たちの思い通りに、自分たちの好きなように生きようとしたのです。

このようなイスラエルの民でした。もう一箇所、民数記21章を見ると、カナンの地に向かっていたこのイスラエルの民はエドムを通って行こうとしました。ところが、エドムがそのことを拒否したのです。そこでモーセは少し遠回りになるけれどエドムを迂回して行こうとしました。そのとき、民はモーセが進路を変えたことに対して不満を抱くのです。そして、我慢できなくなって、神とモーセに逆らって彼らは文句を言うのです。それが21:5に出て来ます。「民は神とモーセに逆らって言った。「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」と。神は燃える蛇を送られました。さばきをくだされたのです。今言ってきたことを整理しましょう。モーセはイスラエルの民を率いてエジプトを出て来た、ところが、モーセが繰り返し繰り返し経験したことは、このイスラエルの民は神に対して不信仰であり、神を恐れず自分の欲望に従って生きようとし、そして、自分の思い通りにならないと不平不満を言い続けたのです。そして、神は彼らに対して何度もさばきを与えられた、目覚めるようにと、そのような生き方が間違っていると神は何度も教えようとなさった、でも、彼らはそのようにしなかった、モーセはそのため心をもめたし、そのために涙を流したでしょう、何度も彼は主の前に立って民のためにとりなしをするのです。心が張り裂けそうだったろうし心はズタズタに引き裂かれたでしょう。なぜなら、20歳以上の人たちは皆、約束の地に入ることはできなかった、皆、神の審判を経験したわけですから、モーセはこのような経験を通して、神というお方は必ず罪をさばかれるということを確信していました。そのことを私たちは覚えなければいけません。ガラテヤ人への手紙で教えるように「人は種を蒔けば、そ

の刈り取りもすることになります。」（6：7）と、自分で刈り取らなければなりません。自分にはその責任があるというのです。モーセはさばきの実際を知っていました。

同時に彼は、そのさばきの理由も知っているのです。なぜさばきがあるのかと。それは、神がどうい
うお方であるかを知っていた彼は、神は罪を憎まれているから必ずその罪をさばかれるという、当然の
ことですが、そのことをしっかり覚えていました。みことばは何度も私たちにそのことを教えます。詩
篇5：4には「**あなたは悪を喜ぶ神ではなく、わざわざいは、あなたとともに住まないからです。**」とあります。
神はどのような悪も喜ばない、これくらいだったらなどは通用しません。どのような小さな罪でも悪
であれば必ずその悪を神は憎まれるのです。箴言8：13では「**主を恐れることは悪を憎むことである。わ
たしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。**」とあります。ソロモンが言ったように、主
を恐れることは悪を憎むこと、なぜなら、主を愛することは神が愛されることを愛することであり、神
が憎まれることを憎むことだからです。神が憎まれることは罪です。だから、神を恐れる人、神を愛す
る人というのは、神が憎まれる罪を憎む者です。新約聖書でもローマ12：9で「**愛には偽りがあっては
なりません。悪を憎み、善に親しみなさい。**」と教えられています。なぜこのように言ったのか、それが神
だからです。モーセはそのことがよく分かっていました。このイスラエルの民の罪に対しては彼らがそ
の報いを受け取ったのです。

同時に、モーセはこのさばきの公正さを知っています。なぜそのように言えるのか、神が全知のお方
だからです。90：8をもう一度見ましょう。「**あなたは私たちの不義を御前に、私たちの秘めごとを御顔の
光の中に置かれます。**」と、つまり、ここでモーセが言っていることは、どんなことでもこの神は知って
いるということです。あなたが一生懸命隠していることも神は全部見ているというのです。だから、人
間の中でどんなにきよい人であっても、神の前にはただあわれみを乞うことしかできないのです。なぜ
なら、すべての人が罪を犯しているからです。すべての隠れたことを神は見ておられるからです。だか
ら、モーセは神の審判、神のさばきは公正である、神は全部見ておられるからと言うのです。エレミヤ
のこのように言いました。16：17「**わたしの目は彼らのすべての行ないを見ているからだ。彼らはわたし
の前から隠れることはできない。また、彼らの咎もわたしの目の前から隠されはしない。**」と。また、新約聖書
ヘブル4：13には「**造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であ
り、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。**」とあります。全部分かっている、
全部見えていると言うのです。シェーファーという神学者は「地上における秘密の罪は、天における公
然の恥辱、醜聞である」と言っています。私たちがどんなに望んでも、どんなに頑張っても神の前に隠
せるものなど何一つ存在していないのです。心のどんなことも神はご覧になっている、そのことをモー
セはちゃんと知っているのです。そして、パウロが言うように「**神は、ひとりひとりに、その人の行ないに
従って報いをお与えになります。**」（ローマ2：6）とあり、同じことが黙示録20：12でも言われてい
ます。「**また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物
が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に
書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。**」と。特に、このみことばはイエス
を信じていなかった人々が経験する神のさばきを記しています。ローマ書でも黙示録でも教えているこ
とは、私たちは一人ひとり神の前に立つこと、そして、神が私たちをさばかれるとき、私たちがしてきた
ことに応じてさばかれるということです。どんなことでも、心の中で思ったこと、想像したこと、誰
もいないところで行なったこと、その全部は神の前には明らかなことであり、神はそれに応じてさばく
というのです。これが神の約束された審判です。だから、誰一人として私たちは神の前に言い訳するこ
とはできないのです。全知の神だからです。そのことを考えるだけでも身が引き締まります。

モーセはそのことに気付いたとき、彼が言えたことがこの9節から出て来ます。「**：9 まことに、私たち
のすべての日はあなたの激しい怒りの中に沈み行き、私たちは自分の齢をひと息のように終わらせませう。：10 私
たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわざいす。それは早く過
ぎ去り、私たちも飛び去るのです。**」と、あっという間にこの人生は終わってしまうと言います。しかも、
神を離れた人の人生というのは苦しみの中に終わってしまうと。それが証拠に、創造主なる神を信じ
ていない人々の老後はどうでしょう？どんな希望があるでしょう？どんな生きがいをもっているでしょ
う？もちろん、いろいろな趣味をもって生きがいを持とうとしています。でも、その後どうなってしまう
のでしょうか？本当に生かされていることを感謝しながら、神に用いていただけることを喜びとしなが
ら生きているのでしょうか？残念ながら、現実はいくつと年を重ねるにつれて希望が薄れてきます。絶
望感が大きくなってきます。いったいあといつまで生きるのだろうと…、私の人生っていったい何だっ
たのだろうと。それは私たちが神の心を知らないからです。11節に「**だれが御怒りの力を知っているでし
ょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。**」とあります。神のお心を知
らない人が多すぎるのです。今、絶望の中にある人がいるなら、あなたが今そのような状況にあるとい

うことは創造主なる神がご存じなのです。あなたが人生を嘆いているように神はあなたを見て嘆いておられるのです。なぜなら、あなたは神の心を知らないのです。あなたを生まれ変わらせようとしておられる神を、あなたは無視し続けている、あなたの罪を赦そうと救い主を送ってくださったのにその救い主を拒み続けている、その結果は何でしょう？今この地上を生きていても神が約束してくださっている喜びをいただくこともなく、そして、あなたが死を迎えたときそれは永遠の破滅です。今生きている間も神がくださる最高の祝福をもらって生きることができないし、死んだあとは永遠の地獄でしかない、あなたはそれを忘れよう、無視しようとしているかもしれませんが、神はそのことを知っておられます。だから、神はあなたのために救い主を備えてくださったのです。

そして、残念ながら、そのような神の心を知らないのはまだイエスを信じていない人だけではない、クリスチャンもそうです。クリスチャンの皆さん、一年一年年を重ねて行くということはあなたにとって喜びでしょうか？あなたのからだが強くなって行き、記憶が鈍って行き、いろいろな病が出てきて、本当に弱さを感じるというのは、あなたにとって不幸なのかそれとも喜びなのか、皆さん、これは喜びなのです。なぜなら、神はあなたに今日という日をくださっているでしょう？神はあなたに永遠のいのちを与えてくださったでしょう？神はあなたを神ご自身のものとしてくださったでしょう？その神はあなたにとっていつも最善のことを為してくださる方です。からだが強くなって行くこと、人間的にはそれがどんなに素晴らしいことでしょうか？と思ってしまいます。しかし、私たちはそれを通して学ぶことがいっぱいあります。私たち人間は自分の弱さに気付くまで神に信頼しようとしません。自分に助けが必要だと気付けば私たちは助けを求めます。しかし、それを否定している間は助けを求めに行こうとしないのです。それほど私たちの心は頑なであり、私たちはプライドに満ち溢れた者なのです。神はそれを削って行ってくくださる、神さま、私はあなたの助けが必要だと神の前に謙虚にさせていってくださる、そして、私たちクリスチャンは確かに死を迎えることは喜びです、素晴らしい救い主にお会いするからです、しかし、今日生きているということは、神はあなたを現役で用いてくださるということの証です。神はまだあなたを使おうとしておられるから今日という一日をあなたにくださったのです。私たちクリスチャンはそう思うのです。今日生きているというのは偶然ではないのです。今日私は神の前に為すことがあるのです。だから、神はこの私を生かしてくださっているのです。さあ、神さま今日私はあなたのために何をしましょう？もっともっとあなたのためにできることを探って行きましょうと、そのように生きるときにいろいろな趣味をもたなくても、生きがいをもって生きて行くことができるのです。あの人に連絡してみよう、あの人に手紙を書いてみよう、あの人を励ましてみよう、まだイエスを知らないあの人に話をしてみよう、このために祈ってみよう、掃除をしてみよう、といろいろなことが出て来ます。そのようにして私たちは主に仕えて行こうとします。なぜなら、私たちは主の心を知ったからです。今日という日は偶然にやって来たものではありません。神の深い摂理とご慈愛によってあなたにこの日が与えられているのです。だから、主のために一生懸命生きようとするのです。

人生はあっという間に終わります。そして悲しいことに、多くの皆さんがこの神を無視し、この神の心を受け入れないがゆえに、苦しみ続きの人生を送っているのです。いつまでそのような人生を歩み続けるのでしょうか？神のところに帰って来ることです。

☆モーセの祈り

この12節から17節まで、モーセの神に対する祈りが出て来ます。12節「**それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。**」と、自分の日を正しく数えることができるように、神の知恵をいただいて今日生きることができるようにと、13節には神のあわれみを求め、14節には神の恵みを求め、15節には神の祝福を求め、16節には神の励ましを求め、17節では神の導きを求めているのです。こんな偉大な神だから私はこの神がいつも必要なのだ、今日必要なのだ、私の信仰者としての歩みにこの神が必要なのだと言って、神の前にモーセは助けを求め続けて行くのです。

☆モーセが神の知恵によって今日正しく生きて行きたいと願ったその理由

私たちは今日この12節を見て来ているのですが、続いて見て行きましょう。最初に言ったように、モーセが望んだこと、それは神の知恵をいただいて今日生きて行きたいということ、そのようにモーセは神の前に祈ったのです。では、なぜモーセがそのようなことを望んだのでしょうか？三つの理由を考えることができます。

1. 今を、この時間を無駄にしたくなかったから

これまで無駄を繰り返してきたけれど、もうそのようなことはしたくないと言います。覚えておられますか？エペソ5：16に「**機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。**」とあります。同じことばはコロサイ4：5にも出て来ます。「**外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。**」

この「**機会を十分に生かして用いなさい**」ということばは、私たちがよく耳にする「**贖い**」ということばに関連しています。市場で買い占めるとか、身代金を出して買い戻すという贖いです。なぜこのことばがここで用いられたのか、そして、日本語の聖書では「**機会を十分に生かして用いなさい**」と訳されたのでしょうか？パウロは何を言いたかったのでしょうか？パウロは、時とかその機会を捕らえて、買い占めて、最善なことに用いるように、賢くふるまって行きなさいと言ったのです。別の言い方をすると、これまで悪いことに用いられてきた時間をこれから買い戻して正しいことのために、神の前に良いことのために用いて行きなさいということです。つまり、パウロが言っていることはもう無駄な人生を過ごしたくないということです。だから、ローマ6：19－20で「**あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。：20 罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。**」と、これまで私たちは自分の肉の欲に従って罪の汚れの中を歩んできたが、もう私たちは救われたのだから、正しくきよく生きて行こうと言うのです。そのパウロは続いて21節でこう言います。「**その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。**」と、つまり、神を無視した生き方、神に逆らった生き方が何かすばらしいもの、祝福をあなたにもたらしたかと言うのです。当然、ここでパウロは何ももたらさなかったという答えを期待しています。そして、彼は付け加えます、「**それらのものの行き着く所は死です。**」と。私たちがしっかり覚えておかなければいけないことは、神に逆らい自分勝手に生きる人生は無駄だということです。神の救いを無視して神に逆らい続けて行く生き方は、もしかすると、人から誉められるかもしれない、人から羨まれるかもしれないけれど、神が言われるのはその人生がもたらす結果は永遠の滅びでしかないということです。「**それらのものの行き着く所は死です。**」とイエスを信じていない方々、あなたはこのことをしっかり覚えなければいけない、これが神のあなたへの警告だからです。クリスチャンである皆さん、あなたは確かにそこから救い出された、しかし、残念ながら私たちの周りにはまだこの永遠の死に向かっている人が溢れています。モーセは自分の目を正しく数えることを神に求めました。自分の人生を無駄にしたくなかったからです。同時に彼は、

2. 今を有効に生きたかったから

無駄にしないだけでなく、かえって有効に生きようとするのです。価値あることをしたかったのです。覚えておられるでしょうか？パウロはIコリント3：10－15で非常に大切なことを教えています。

「**：10 与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。：11** というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。：12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、：13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。：14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。：15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」、建物を建てる話です。賢い建築家は正しいしっかりした土台を据えます。11節に「**その土台とはイエス・キリストです**」とあります。家にたとえて人生を話しているのです。家を建てるときに一番大切なのは土台です。あなたの人生にとって最も大切なのはあなたの土台です。つまり、あなたがこの救い主イエス・キリストを受け入れるということです。ですから、この12節から見て行くと、このイエス・キリストという土台の上に家を建てている人のことです。つまり、クリスチャンに対してです。三つの高価な建材のこと、同時に、無価値な建材のことです。「**金、銀、宝石**」と「**木、草、わら**」の二つのグループに分けられます。高価な建材とは何でしょう？「**金、銀、宝石**」とは？（1）これは正しい教えです。というのは、コリントの教会には間違った教えが入ってきて人々を混乱させていたから、イエスを信じたあなたはしっかりと正しい教えに従って歩んで行く、みことばに従って生きて行くことです。そうでなければ、あなたの信仰はこの「**木、草、わら**」で建てた家になってしまう、全く無価値なものになってしまうのです。悲しいことはクリスチャンがみことばから外れてしまうことです。みことばよりも一般的な常識であったり、人間の考えや世の人の知恵に求めても何も答えがない、聖書に戻らなければいけないのです。私たちが信仰者として価値ある人生を生きて行くために必要なのは、みことばにしっかりと立つことです。（2）みこころに沿って生きること、それが価値ある人生を過ごすことです。自分のために生きるのか神のために生きるのか、主に忠実に生きるのか不忠実に生きるのか、主に対して熱心に生きるのか不熱心に生きるのか、その選択はあなたです。しかし、もしあなたが主に対して常にみこころを求めそれに忠実に従って行こうとする、主に対して熱心に生きて行こうとする、その生き方は価値あるものです。しかし、あなたが主のみこころを求めず自分の思い通りに生きようとしたり、また、主に対して不忠実であったり不熱心であったら、それはまさにこの「**木、草、わら**」のむなしい、

無価値な人生を生きることになります。(3) 正しい動機で働くことです。いいことをやってもその動機がどうか、正しい動機でもってしているかどうかです。正しい動機をもって主の栄光のために一生懸命にやっているなら、それは価値あるものです。この「**金、銀、宝石**」で建てるものです。でも、人からよく見られたいからとか、人から誉められたいからとか、間違った動機でしているなら、それはまさにここで言われている「**木、草、わら**」で家を建てることになります。

パウロが望んだこと、パウロが教えたこと、そして、モーセが望んだことというのは、人生を有意義に生きて行きたい、有効に生きて行きたい、神の前に価値ある人生を生きて行きたいということです。

3. 神を恐れる者となりたかったから

というのは、私たちが神の前に正しく歩んで行くなれば、私たちは神によって変えられて行きます。自分の人生の短さをしっかり覚えて、罪に対して神がどのような思いを抱かれているのかということを私たちがしっかり認識するならば、私たちは変わってきます。そして、そのことによって私たちは変えられて行くのです。なぜなら、今日という日を大切に生きようとするからです。モーセはそうのように今日という日を神の前に正しく生きて行きたいと願いました。

最後に、私たちはなぜそのことを考えないのでしょうか？なぜ、自分の人生を正しく数えようとしないのでしょ？その理由は、(1) 失望＝私たちは今日イエスが帰ってくるかもしれないという思いをもちながら生きてきました。でも、なかなか帰って来られない、そのうちに失望します。まだしばらく帰って来られないと。(2) 自我＝私たちはイエスにまだ帰って来てほしくない、まだ終わりが来てほしくないのです。もっと生きたい、したいことが山ほどあるから…。その結果、私たちは神のみこころに従って生きるとか、今日一日を神の前に正しく生きるなどということは横に置いて、まだまだ日はあるのだから、自分が死を迎える寸前に悔い改めて、それまでは自分のやりたいことをやろうと。それがいかに空しいことであり神の前に価値のない人生であるかということを忘れてしまうのです。ジョージ・ウィットヒルドという神学者にある人が「もしイエスさまがあと三日で戻って来られることをあなたが知っていたら、あなたは何をしますか？」と聞かれたとき、彼は「私は立てられている予定通りにこの三日間を過ごします」と答えたと言います。なぜでしょう？彼も同じように、モーセがそうであったように、パウロがそうであったように、今日という日を神の前に無駄なく正しく歩んで行こうとしていたからです。こんなことを言った人がいます。絶対に戻ってこない四つのことがある、語られたことば、放たれた矢、過ぎ去った人生、逃した機会と。

皆さん、神は今日という日を私たちにくださった、いつまで私たちはこの地上にいるか分かりません。しかし、分かっていることは、今日という日をくださった神はあなたに望んでおられることがあるということです。それはあなたがこの神のために生きることです。無駄にしてきた人生を止めることです。そして、一日一日を神の知恵をいただきながら、助けをいただきながら主に従って行くことです。なぜなら、人生とは短いものです。明日のことが分からないのが現実です。モーセが言うように「**それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。**」と、そのように願って生きませんか？神さま、今日私はあなたの前に正しく生きたい、そして、明日をくださるなら明日もそうして生きたい、そのようにして私はこの地上においてあなたの役目を果たしたい、そうして私は人生を全うしたいと。これこそが価値ある人生を過ごすことなのです。そのようにして生きてください。